



Optimal method for measuring invasive size that predicts survival in invasive mucinous adenocarcinoma of the lung

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2024-01-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 沖, 智成 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/0002000067

論文審査の結果の要旨

浸潤性粘液性肺腺癌（IMA）は肺腺癌の亜型の一つで、豊富な細胞内粘液を有する杯細胞を特徴としており、2015年の世界保健機関（WHO）分類で新たに規定された。IMAの肺胞上皮置換型領域は、気腔が粘液で満たされて広範囲に進展するが、この部分を浸潤径に含めるか否かに関し、予後的意義の観点から十分な知見は未だ得られていない。そこで、本研究では、IMAの予後を予測する最適な病理学的浸潤径の測定方法を明らかにすることを目的とした。

2004年から2015年までの期間に、国立がん研究センター東病院で肺腺癌の完全切除術を受けた患者のうち、病理組織学的に10%以上の杯細胞を含み、リンパ節転移および遠隔転移がない肺腺癌に罹患し、術前治療を受けていない症例を対象とした。浸潤径は、肺胞上皮置換型成分を浸潤径から除外する方法（ELM）と、肺胞腔が粘液で満たされている肺胞上皮置換型成分を浸潤径に含む方法（ILM）の二方法で測定された。浸潤径を含む各臨床病理学的因子の全生存期間に対する影響についてCox回帰モデルで単変量解析を行い、有意であった因子を用いて多変量解析を行った。さらに、Concordance probability estimate（CPE）と赤池情報量規準（AIC）を算出した。生存曲線はカプランマイヤー法で作成した。本研究はがんセンター東病院倫理審査委員会の承認（2017-428）を得て行われた。

対象は101症例であり、病理学的腫瘍径中央値は2.8 cmで、49%に粘液で肺胞腔が満たされた肺胞上皮置換型成分を認めた。浸潤径中央値はELMの場合は1.4 cm、ILMの場合は2.1 cmであった。全生存期間に対するCox回帰分析では、ELMで計測した浸潤径のハザード比がILMで計測した浸潤径のハザード比より高値であった。CPEはELMの方がILMより大きく、識別能がより高いと判断された。さらにAICはELMの方がILMより小さく、予測能がより高いと判断された。また、生存曲線に関しては、ELMでは各病期が分離していたが、ILMではT3とT4で交差がみられた。また、ELMからILMに変更することで病期が上がった症例が18例見られたが、病期が変わらなかった83例との間で生存率を比較しても有意差は見られなかった。以上の結果は、ELMはILMに比べて高い予後予測能を有することを示し、このことからIMAの病理学的浸潤径は肺胞上皮置換型成分を除外して計測すべきであると結論づけられた。

審査委員会は、本研究によりIMAの予後を予測する最適な病理学的浸潤径の測定方法が同定された点、また、これが実臨床で利用される可能性がある点を高く評価した。以上により、本論文は博士（医学）の学位の授与にふさわしいと審査員全員一致で評価した。

論文審査担当者	主査	新村	和也	副査	馬場	聡
	副査	須田	隆文			